

第4章 平成22年度（第23次）発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要（図10）

第23次調査は、平成22（2010）年9月から同年12月にかけて実施し、三城北西側帯曲輪に2地点（2301区・2302区）、平成22年度宇土城跡保存整備工事の雨水排水工事に伴う調査区（2303区）の計3地点で発掘調査を行った。調査面積は計101㎡で、内訳は2301区：34㎡、2302区：47㎡、2303区：20㎡である。

21・22次調査に引き続き、23次調査も三城周辺の帯曲輪の遺構確認を主目的とした調査である。三城東側の21次調査では、掘立柱建物跡を12棟検出し、同地に恒常的に建物が立地していたことが判明したが、21次調査区北西側で実施した22次調査では、一転して遺構の重複をあまり認めず、掘立柱建物跡の可能性のある柱列を検出した程度であり、三城東側と北側の帯曲輪では土地の利用状況に明確な違いがあることが判明した。

23次調査の結果、22次調査区よりさらに遺構密度が薄いことが明らかとなり、建物などを配置する空間として利用された痕跡は確認できなかった。

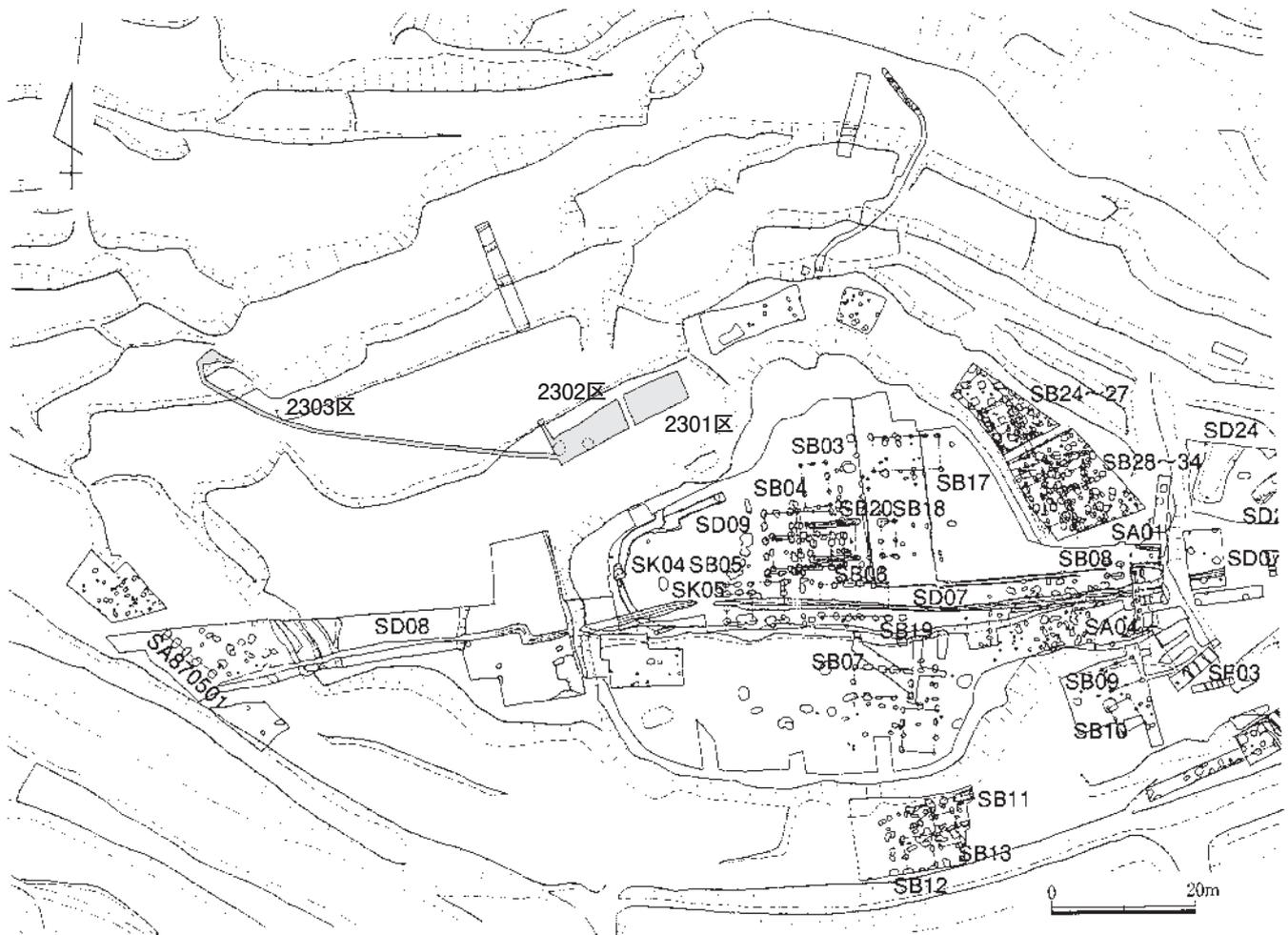


図10 23次調査区配置図（1/1,000，アミ部分：23次調査区）

以上の調査の結果、遺構外より須恵器の無蓋高坏や土師質土器の坏、瓦質土器（火鉢・播鉢など）、中国製陶磁器（青磁・染付など）、中近世の国産陶磁器（備前焼・肥前系陶磁）などの古墳時代から近世までの遺物が出土したが、遺構の少なさに比例し、その出土数はかなり少ないといえる。なお、後述する本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

（2）調査日誌抄

平成22（2010）年	10月5日	2302区で耕作に伴う畝状掘込み跡を検出。	
9月2日	23次調査予定地周辺の伐採。	10月12日	宇土市文化財保護審議会が調査現場を視察。
9日	鶴城中学校生徒職場体験（3名）。		2302区で畝状掘込み跡に先行する土坑と溝状遺構を検出。
16日	重機による表土除去。		
20日	第5回体験発掘を実施（参加者19名）。	10月13日	2301区で畝状掘込み跡埋土掘削開始。
21日	各調査区で遺物包含層掘削作業開始。	10月20日	掘削作業完了。遺構検出状況写真撮影。
28日	グリッド杭の設定。2301区で耕作に伴う畝状掘込み跡を検出。	11月15日	遺構実測作業開始。
		12月6日	遺構実測作業終了。

第2節 調査区の概要

2301区（図11，図版6）

三城北西直下に位置する帯曲輪に設定した調査区であり、22次調査2202区より南西へ約10mの距離にある。重機により表土を除去し、遺物包含層を人力で掘り下げて遺構検出作業を行った。その結果、表土層と遺物包含層の堆積があまりなく、現況グラウンドレベルより約40cm下で地山面に達するが、これは22次調査2202区と同様に、調査区の大部分が耕作に伴い削平されたことに起因するものと推測される。

地山面で調査区全面にわたり南北に主軸をもつ畝状掘込み跡を検出したが、この連続する畝状の浅い掘込み跡は、三城南側帯曲輪で実施した19次調査、同西側帯曲輪で実施した20次調査などで検出しており、検出面や埋土の状況などから近現代以降の耕作に伴う造作と判断される。これらの地形改変の影響なのか、ピットや土坑などの遺構は検出していない。

表土や遺物包含層より、須恵器や土師質土器、中国製青磁・染付などが出土した。

2302区（図11，図版6・8）

2301区西隣に設定した調査区である。表土層と遺物包含層の堆積があまりなく、2301区同様に地山面で南北に主軸をもつ畝状掘込み跡を検出したが、本調査区においても遺構密度は希薄であった。

土坑状遺構 S K11，S K12のうち、前者は長軸約1.0m × 短軸約0.8m，検出面からの深さ0.5mで、底面において安山岩の剥片を確認した。これは、安山岩の巨石が抜き取られた痕跡とみられる。重複関係より、この遺構は畝状掘込み跡に先行することが明らかであり、本調査区より北東へ約30mにある大型の矢穴痕が並ぶ安山岩の巨石の存在とあわせて、加藤清正による近世宇土城改修の石垣石材採掘に伴う造作の可能性を指摘しておきたい。

また、同じく畝状掘込みに先行する遺構として、調査区東側で検出した S D23がある。幅約30cmで、主軸は北西－南東であり、畝状掘込み跡とは主軸を異にする。南側から北側に向かって傾斜すること、S D23内には拳大の礫が充填されていることなどから判断すれば、排水に関係する遺構とみられる。ただし、中世段階の遺構かどうかは判然としない。

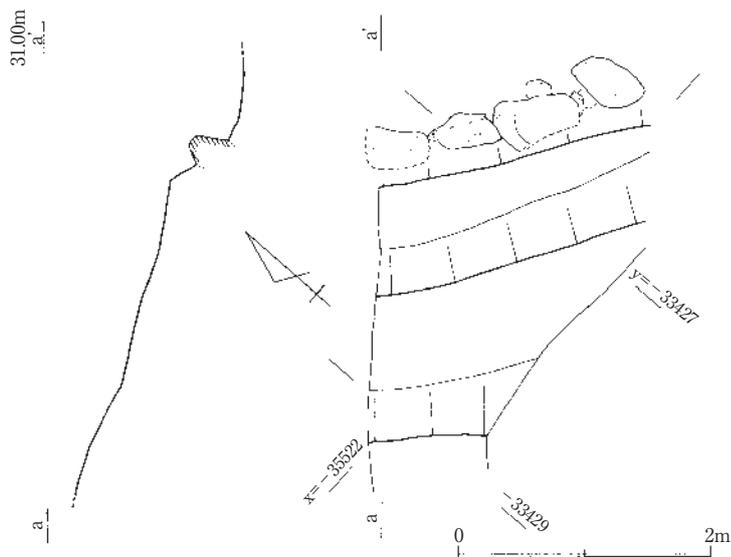
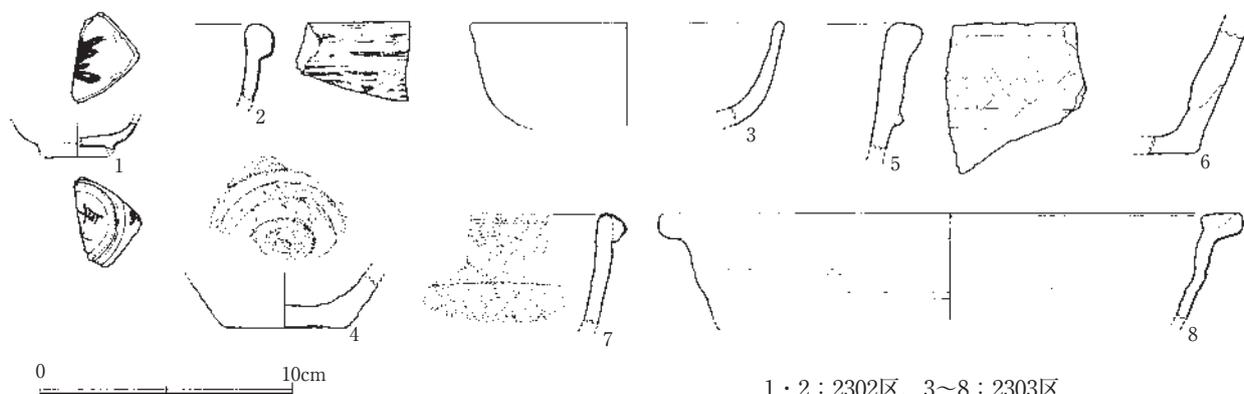


図12 2303区北端調査状況 (1/60)



1・2：2302区, 3～8：2303区

図13 23次調査出土遺物 (1/3)

表土や遺物包含層より、景德鎮窯系染付、肥前系などの近世陶磁器が出土した。

2303区 (図12, 図版7)

平成22年度宇土城跡保存整備工事の雨水排水工事に伴い設定した調査区である。調査の結果、溝状の掘込みや石垣などを検出したが、本調査区から出土した遺物から判断すれば、これらは中世段階のものでなく、近世以降の土地改変に伴うものと判断される。

表土や遺物包含層より、須恵器や土師質土器、瓦質土器、備前焼、肥前系などの近世陶磁器が出土した。

第3節 出土遺物

遺構外出土遺物 (図13, 表4, 図版8)

2302区 1は16世紀後半頃の景德鎮窯系染付の小杯で、高台内に「大□年□」の文字があることから、おそらく「大明年造」の銘を持つものであろう。2は17世紀後半頃～18世紀前半頃の肥前系片口鉢とみられ、外面に白化粧土で刷毛目文を施す。

2303区 3は須恵器の無蓋高坏の坏部と考えられる。4は土師質土器の鉢とみられ、底部に糸切り

痕が認められる。5は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面にスタンプ文を施す。6は備前焼の壺の底部片で、15～16世紀代。7・8は肥前系陶磁。7は17世紀後半頃の口縁部が玉縁状を呈する鉄釉の播鉢。8はタキ成形の鉢で16世紀後半頃～17世紀初頭頃の製作。

表4 23次調査出土遺物観察表

2302区遺構外出土遺物

挿図 No.	実測 No.	種類 器種	胎土・材質	焼成	色調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備考
1	23-8	染付 小坏	緻密	良好	釉:明緑灰 胎:灰白	内外:施文, 施釉	包含層 ②	〈1.1〉 ③ 〈3.0〉	景徳鎮窯系
2	23-2	陶器 片口鉢	緻密	良好	釉:にぶい黄橙 胎:橙	内外:施釉	包含層 ②	〈3.1〉	肥前系

2303区遺構外出土遺物

挿図 No.	実測 No.	種類 器種	胎土・材質	焼成	色調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備考
3	23-4	須恵器 無蓋高坏	1mm未満の砂粒	良好	内:灰 外:にぶい黄	内外:回転ナデ	包含層 ①	① 〈12.4〉 ② 〈4.1〉	
4	23-7	土師質土器 鉢	角閃石, 1~3mm程 の砂粒	やや不良	内:にぶい黄褐 外:黒褐	内:ナデ 外:ナデ, 施文	排土中 ②	② 〈2.2〉 ③ 〈4.8〉	
5	23-6	瓦質土器 火鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内:暗灰黄 外:にぶい黄橙	内:ナデ 外:ケズリ, ナデ	包含層 ②	② 〈5.0〉	
6	23-5	備前焼 壺	緻密	良好	内:灰褐 外:赤褐	内外:ナデ	包含層 ②	② 〈5.1〉	
7	23-1	鉄釉陶器 播鉢	緻密	良好	内:にぶい褐 外:にぶい赤褐	内:ナデ, 播目 外:ケズリ, ナデ, 施釉	包含層 ②	② 〈4.4〉	肥前系
8	23-3	陶器 鉢	緻密	良好	内:にぶい褐 外:褐	内外:ナデ, 施釉	包含層 ①	① 〈23.0〉 ② 〈4.3〉	肥前系

第5章 平成23年度（第24次）発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要 (図14)

第24次調査は、三城東側に位置する南北方向にやや長い帯曲輪に調査区2401区を設定し、平成23(2011)年9月から同年11月にかけて行った。調査面積は140㎡である。

本調査は、21次調査以降継続実施している三城周囲の帯曲輪における遺構確認を主目的とした調査の一環として実施した。調査の結果、調査区西隣の帯曲輪で多数検出したような掘立柱建物跡を確認することはできなかったが、中世の所産とみられる溝状遺構SD24を検出した。

遺構埋土や遺構外より土師質土器や須恵器、瓦質土器（捏鉢・播鉢など）、中国製陶磁器（青磁・白磁・染付など）、近世の国産陶磁器（肥前系）、基石状石製品などが出土した。後述する本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

なお、この帯曲輪の南側では、三城南側に東西方向に延びる溝跡SD07の範囲確認などを目的として19次調査で発掘調査を実施している。調査の結果、SD07が当該帯曲輪南側を東西方向に配され、さらに東側の曲輪まで延びることが判明しており、この調査内容については、平成25年度に刊行した『宇土

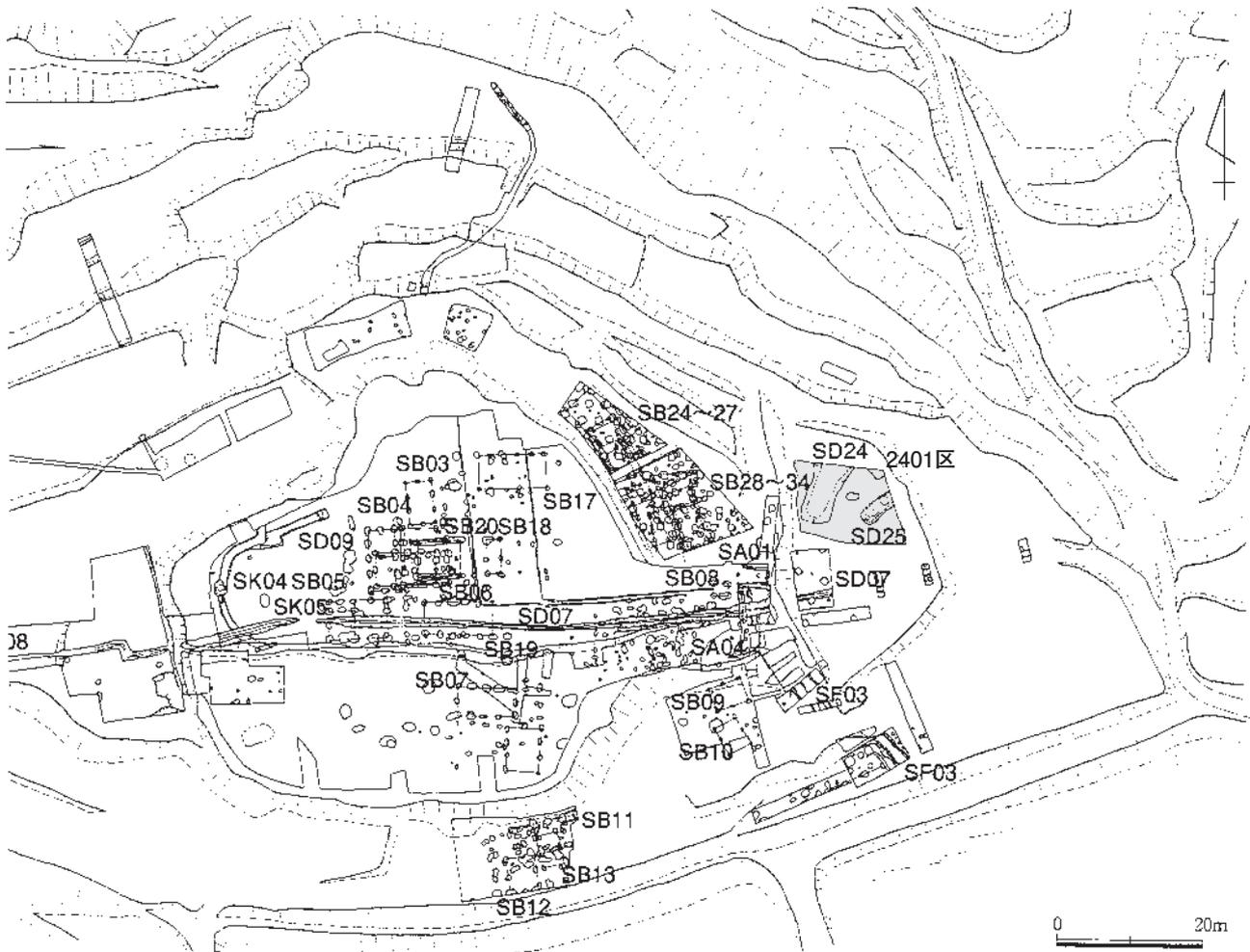


図14 24次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分：24次調査区)

城跡（西岡台）』XII（宇土市埋蔵文化財調査報告書第34集，2014年）で報告している。

（2）調査日誌抄

平成23（2011）年	10月3日	基盤層上面にて，部分的に遺構を確認。
9月15日 重機による表土層除去。	6日	地山面で部分的に溝状遺構 S D 24 検出。
23日 市民を対象とした第6回体験発掘を実施（参加者20名）。	26日	遺物包含層（3層・4層）掘り下げ終了。調査区遺構検出状況写真撮影。S D 24，S D 25で検出した遺構埋土を部分的に掘り下げ開始。
26日 遺物包含層（2層）掘削開始。	11月1日	掘り下げ終了。調査終了状況写真撮影。
29日 遺物包含層（2層）掘削終了。遺物包含層（3層）の掘り下げ開始。	16日	遺構実測図作成完了。

第2節 調査区の概要と検出遺構

（1）調査区の概要（図15，図版9）

2401区は三城東側帯曲輪に設定した調査区であり，三城より東へ約30mの距離に位置する。19次調査で発掘調査を行ったT1904～T1906と同一の帯曲輪で，今回はその北側に調査区を設定した。

重機により表土を除去し，遺物包含層を人力で掘り下げ後，遺構検出作業を行った結果，2条の溝状遺構と2基の土坑，10基のピットを検出した。本調査は保存整備のための確認調査であるため，検出遺構の埋土を全て掘削することは避け，必要と判断される部分については，トレンチで埋土を掘削し，遺構の形状や堆積土の状況などを確認した。

本調査区の基本層序は5層に分けられる。1層は褐色土（表土），2層は1層よりややしまりのある暗褐色土で，3層はさらにしまりや粘性が強くなる。4層は地形が緩やかに下降する調査区東側のみで確認した。5層は基盤層（地山）である。なお，本調査区南側で実施した19次調査の結果，今回の調査区が位置する帯曲輪は，近現代の果樹植樹に伴う重機を用いた地形改変で基盤層上面まで攪乱がおよんでいることが判明しており，1～4層は地形改変後に堆積した土である。このことは，今回検出した遺構が全て5層上面で検出したことと整合する。

検出遺構のうち，中世期の遺構と推定されるものに溝状遺構 S D 24がある。南北方向に主軸をもち，城郭関連の遺構と考えられる。S D 25は遺物が出土していないため時期が明確でない。また，2基検出した土坑（S K 13，S K 14）については，時期や性格を推定する手がかりが少なく，城郭に関連する遺構か不明である。

なお，調査区全体で合計10基検出したピットは，いずれも一辺80～90cm程度の方形を呈し，規則的に並んでいる。この類似の掘込み跡を21次調査区全面で検出しているが，これらは先述のとおり植樹痕と推定され，このことを示すように，1基から明らかな現代遺物（磁器）が出土している。

（2）検出遺構（図15・16，図版10・11）

S D 24 調査区西側に検出した南北に主軸をもつ溝状遺構である。北側は調査区外に延び，南側は調査区南西隅で端部を確認した。検出規模は，長さ約8.5m，幅約4.2～4.5mである。遺構の形状や堆積状況などを確認するため，トレンチを2ヶ所設けて調査した結果，検出面から約0.6mの深さで平坦面を検出した。埋土は1～2層に分けられ，時期をおかずに埋没した可能性が高い。断面は逆台形を呈する。埋土より土師質土器や須恵器を主体とした土器片や龍泉窯系青磁片，滑石製石鍋片などが出土し，

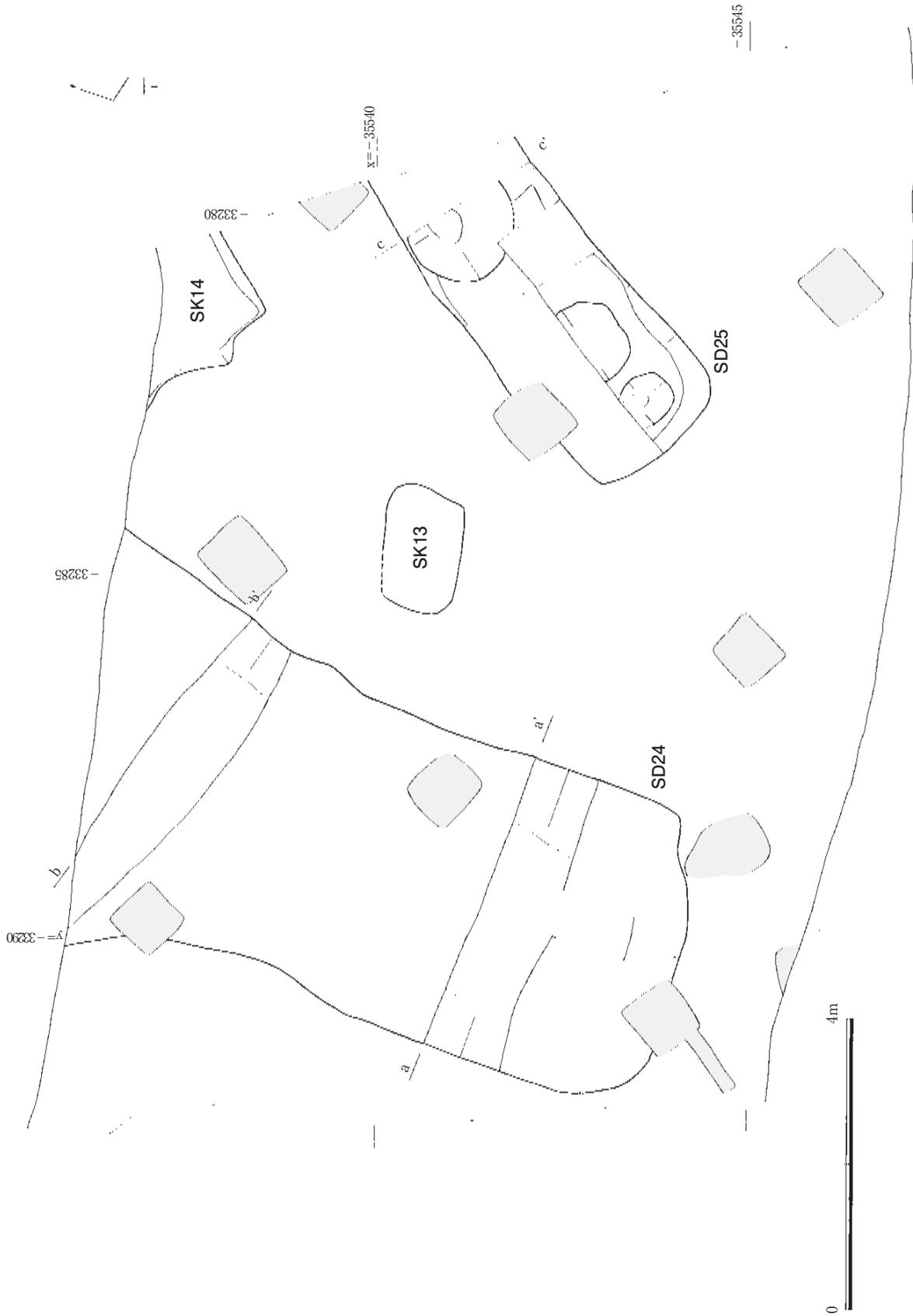


図15 2401区遺構配置図（1/80、アミ部分は攪乱）

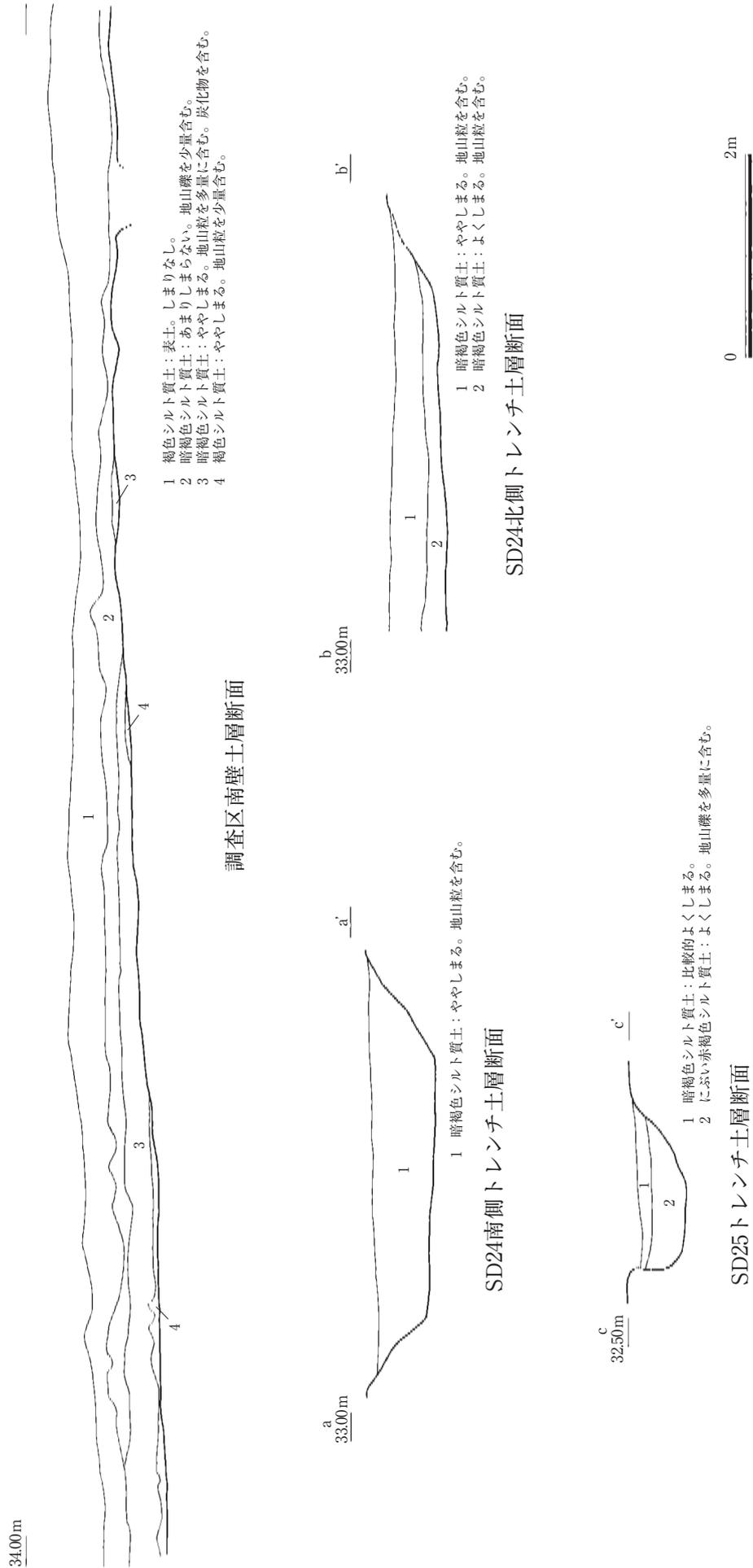


図16 2401区及びSD24・25土層断面図 (1/60)

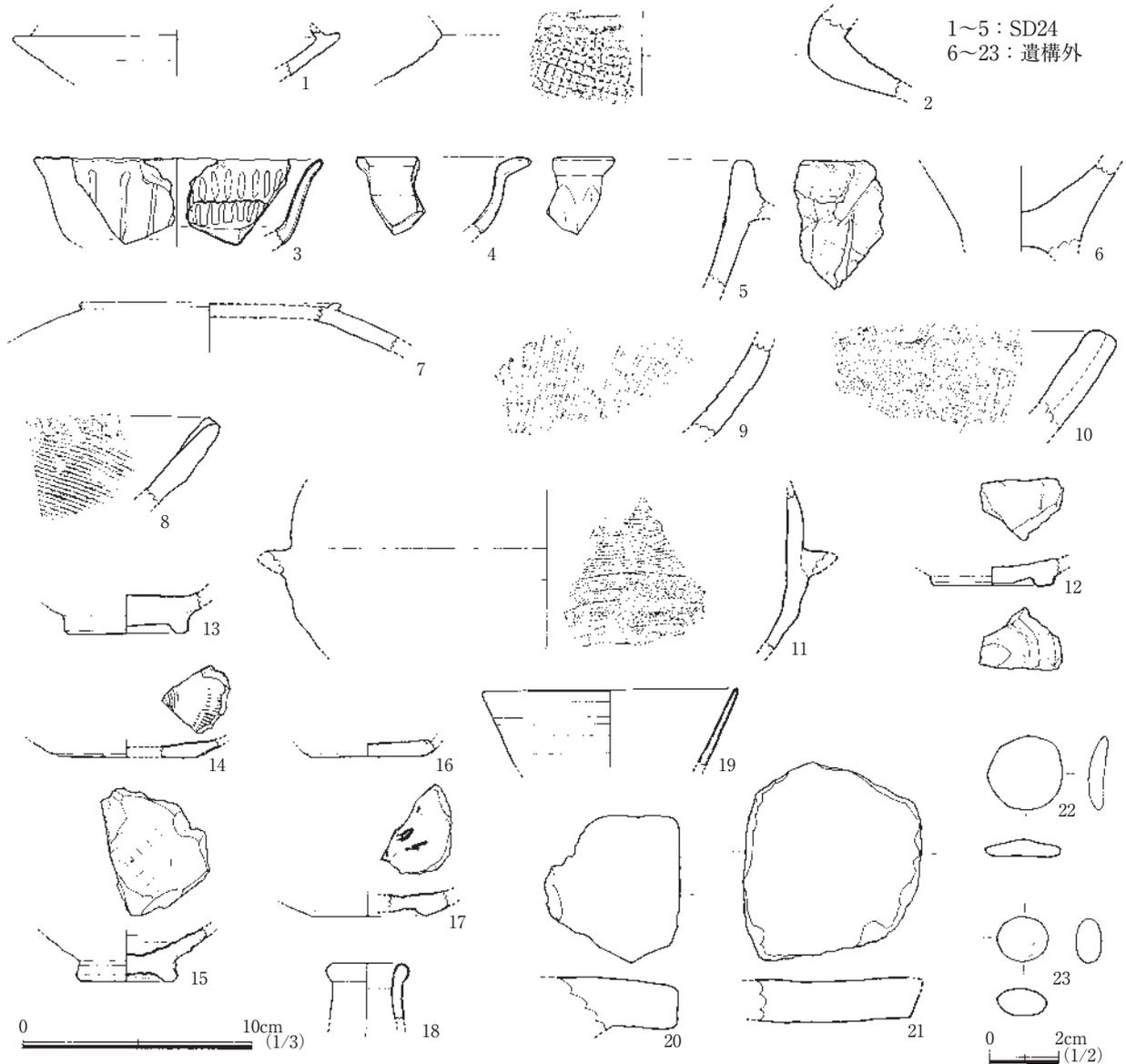


図17 24次調査出土遺物（22, 23は1/2, その他は1/3）

近世以降の遺物を包含しないことから、本遺構は中世段階のものと推定される。

調査当初、配置状況から豎堀跡と想定していたが、後述する第6章で報告する第25次2504区の調査によってこのことは否定された。また、底面において明確な硬化面は検出していないが、帯曲輪内に配置された道として利用されていた可能性がある。

SD25 調査区東側で検出した南西-北東方向に主軸をもつ溝状遺構である。検出規模は、長さ約5.0m、幅約2.2m、深さ約0.5m。東側は調査区外に延びており、部分的に掘り下げた結果、底面は整形されておらず凹凸があることから、未完成の溝だった可能性がある。遺物は出土しておらず、時期は明確ではない。

第3節 出土遺物

SD24（図17, 表5, 図版11）

1・2は須恵器。1は7世紀前半頃の坏身で、内外面とも回転ナデを施す。2は甕の頸部片で外面に

格子状タタキを施す。3・4は龍泉窯系青磁。3は14世紀末頃～15世紀中頃の皿で、外面に簡略化した蓮弁文、内部側面には菊花状の文様を施す。4は外面に蓮弁文を施文する14世紀代の皿。口縁部が「くの字」形に屈曲する。5は滑石製石鍋で、内外面とも研磨痕がある。

遺構外出土遺物（図17，表5，図版11）

6～11は土器。6は弥生時代後期の甕の脚部片である。7は小型のつまみを有する蓋とみられる須恵器で、頂部に細い粘土紐を貼付けてつまみを成形している。8～11は瓦質土器で、8は捏鉢，9・10は播鉢，11は羽釜である。9は6本単位，10は5本単位の播目をそれぞれ施す。11の鏝部は粘土帯貼り付けで成形する。

12～19は陶磁器で、12～17は中国製及び李朝陶磁，18・19は肥前系陶磁。12～14は青磁で、12は龍泉窯系の皿で14世紀末頃～15世紀代，13は龍泉窯系の碗で13～14世紀代の製作。14は12～13世紀代の同安窯系の皿で、見込みに櫛描きを施す。15は李朝陶磁の可能性が高い砂目積みの陶器で、15～16世紀代のもの。16は13世紀代～14世紀中頃のいわゆる口ハゲの中国製白磁皿。17は16世紀後半頃の漳州窯系染付の碁笥底皿で、見込みに文様を施す。18は白磁もしくは染付の瓶の口縁部で、江戸後期のもの。19は白磁碗。18世紀代の製作。

20・21は近世とみられる瓦で、20は丸瓦，21は平瓦の破片である。22は灰白色を呈する小型の円盤状陶製品で、おはじきか碁石として使用されたものか。23は楕円形を呈する碁石状石製品である。粘板岩製とみられ灰黒色を呈し、表面は丁寧に研磨を施す。

表5 24次調査出土遺物観察表

S D 24出土遺物									
挿図 No.	実測 No.	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考
1	24-2	須恵器 坏身	緻密	良好	内:灰黄褐 外:黄灰	内外:ナデ	埋土	② 〈2.1〉	
2	24-7	須恵器 甕	1mm程の砂粒	良好	内:灰 外:黄灰	内:ナデ 外:格子状タタキ, ナデ	埋土	② 〈3.6〉	
3	24-15	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内外:施文, 施釉	埋土	① 〈12.0〉 ② 〈3.8〉	龍泉窯系
4	24-22	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:施釉 外:施文, 施釉	埋土	② 〈3.4〉	龍泉窯系
5	24-11	石鍋	滑石製	-	内外:灰	内外面とも研磨	埋土	② 〈5.6〉	
2401区遺構外出土遺物									
挿図 No.	実測 No.	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考
6	24-3	弥生土器 脚台付甕	角閃石, 石英, 1~ 2mm程の砂粒	良好	内外:にぶい黄橙	内:ケズリ, ナデ 外:ナデ	包含層	② 〈3.9〉	
7	24-8	須恵器 蓋	緻密	良好	内:灰 外:オリーブ灰	内外:ナデ	包含層	② 〈2.1〉	
8	24-4	瓦質土器 捏鉢	1mm程の砂粒	良好	内外:灰	内:ケズリ, ナデ 外:ユビオサエ, ナデ	包含層	② 〈3.9〉	
9	24-5	瓦質土器 播鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内外:淡黄	内:ナデ, 播目 外:ユビオサエ, ナデ	包含層	② 〈4.2〉	
10	24-6	瓦質土器 播鉢	1mm程の砂粒	良好	内外:灰	内:ナデ, 播目 外:ナデ	包含層	② 〈4.8〉	
11	24-1	瓦質土器 羽釜	雲母, 1mm程の砂粒	やや不良	内外:灰黄	内外:ケズリ, ナデ	包含層	② 〈7.0〉	
12	24-19	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:回転ナデ, 施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈1.2〉 ③ (5.3)	龍泉窯系
13	24-18	青磁 碗	緻密	良好	釉:オリーブ灰 胎:灰白	内:施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈1.8〉 ③ (5.4)	龍泉窯系
14	24-16	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:施文, 施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈0.8〉 ③ (6.0)	同安窯系
15	24-20	白磁 碗	緻密	良好	釉:灰白 胎:浅黄橙	内:回転ナデ, 施釉 外:施釉	包含層	② 〈2.4〉 ③ (4.2)	李朝陶磁の可能性 高い
16	24-23	白磁 皿	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内:施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈0.7〉 ③ (5.0)	中国製
17	24-17	染付 皿	緻密	良好	釉:灰白 胎:浅黄橙	内:施文, 施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈1.1〉 ③ (5.0)	漳州窯系
18	24-21	白磁 瓶	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内:ナデ, 施釉 外:施釉	包含層	② 〈3.6〉 ③ (2.5)	染付の可能性も有 肥前系
19	24-14	白磁 碗	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内外:施釉	包含層	② 〈11.0〉 ③ (11.2)	肥前系
20	24-10	瓦 丸瓦	1~5mm程の砂礫	良好	灰	ナデ	包含層	残長5.8	
21	24-9	瓦 平瓦	1~4mm程の砂礫	良好	灰黄	ヘラナデ, ナデ	包含層	残長8.5, 厚さ1.8	
22	24-13	円盤状陶製 品	緻密	良好	灰白	施釉	包含層	直径2.2, 最大厚0.5 ④3	
23	24-12	基石状石製 品	粘板岩か	-	オリーブ黒	全体を研磨	包含層	直径1.3~1.4, 最大 厚0.7 ④3	

第6章 平成24年度（第25次）発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要 (図18)

第25次調査は、平成24年5月から同年9月にかけて実施し、2501区～2504区の計4地区に分けて発掘調査を行った。調査面積は計146㎡で、内訳は2501区：54㎡、2502区：75㎡、2503区：8㎡、2504区：9㎡である。

本調査の主たる目的は、第1次調査において三城南東側で検出した道路状遺構SF03（1次調査検出のSX01と同一遺構）未確認部分を明らかにすることであり、平成24年度保存整備工事で当該遺構を復元整備するにあたり、形状や範囲などを確認する必要がある。SF03は西岡台南側から三城へ登るための通路として機能しており、現代においても里道として踏襲されていたことがわかっている。また、19次調査でもその一部を確認している。

調査の結果、SF03の未確認部分を検出した。また、遺構埋土や遺構外より土師質土器（坏・播鉢）や須恵器（甕・碗）、瓦質土器（捏鉢・火鉢など）、中国製陶磁器（青磁・白磁など）、近世の国産陶磁器（肥前系）、鉛玉（鉄砲玉）などが出土したが、本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

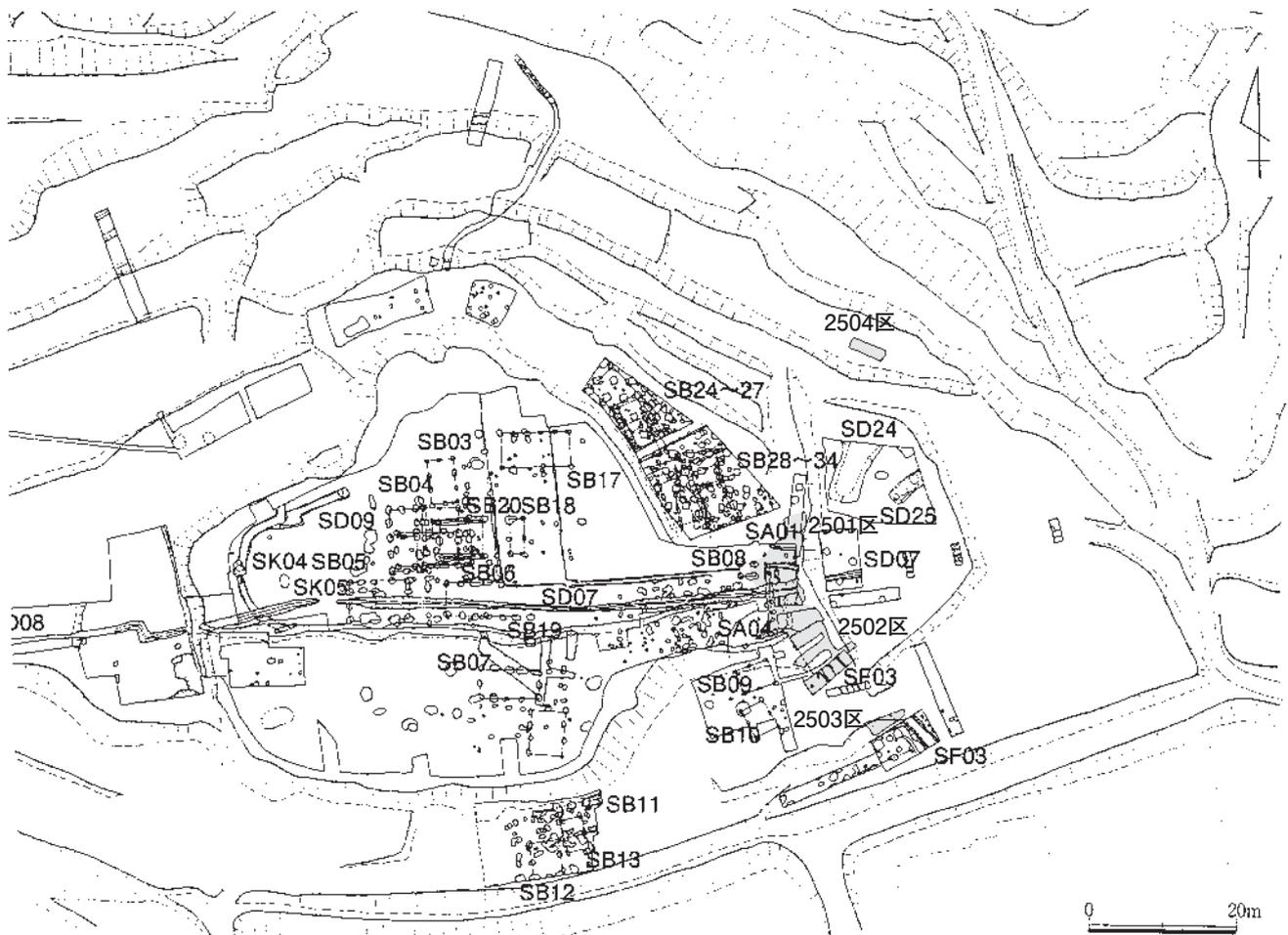


図18 25次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分：25次調査区)

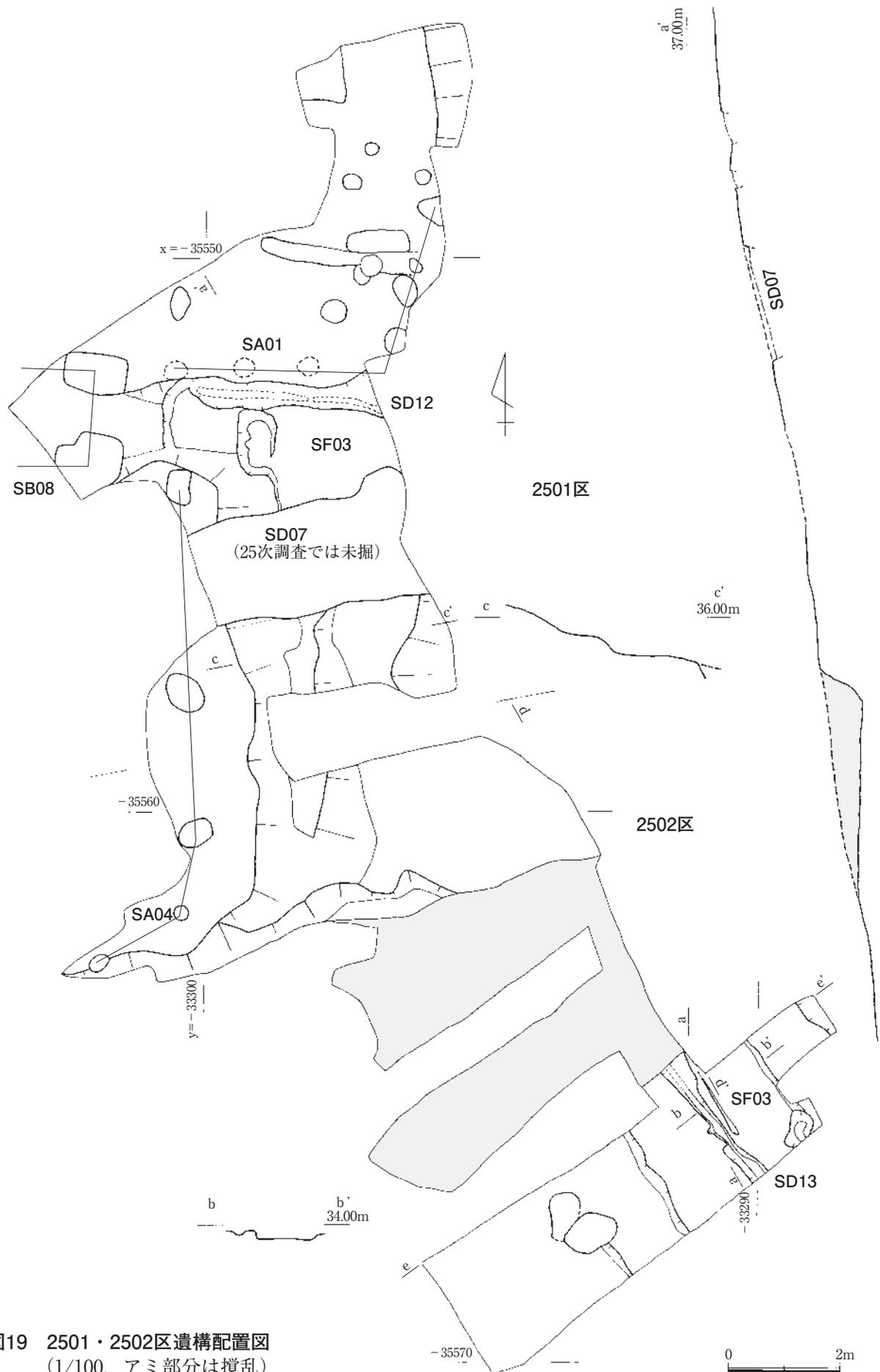


図19 2501・2502区遺構配置図
(1/100, アミ部分は攪乱)

なお、調査期間中の6月3日、「西岡台キャッスルウォーキング」と題した現地見学会を実施した。これは、宇土城跡全域を歩き、曲輪・堀跡などの城郭遺構や発掘調査の成果などを説明して参加者に城跡の全体像を紹介する取組みであった。その一環として、25次調査状況について発掘現場で説明を行った。

（2）調査日誌抄

平成24（2012）年	5月15日	重機による表土除去。	13日	2502区南東隅調査区を拡張。道路状遺構 S F 03の幅を確認。2503区を東側へ拡張。
	17日	調査開始。2501区及び2502区で攪乱層の除去と層ごとの掘り下げ開始。	15日	2504区完掘状況写真撮影。
	28日	2501区にて第1次調査の遺構プランを再確認。2502区の南側に新たに2503区を設定。2502区と並行して堆積土の掘り下げ開始。	20日	2501～2503区調査状況写真撮影。
	31日	2501区で第1次調査検出遺構を全て確認。	7月5日	平成24年度第1回史跡宇土城跡保存整備検討委員会の指摘事項にもとづき、門跡 S B 08周辺の柵跡 S A 01の配置状況を確認するため、2501区を拡張。
6月3日		城郭遺構と25次発掘調査現場を見学する「西岡台キャッスルウォーキング」開催（参加者25名）。	9日	拡張部分を中心とした調査状況写真撮影。発掘作業終了。
	6日	24次調査で検出した溝状遺構 S D 24の範囲を確認するため、24次調査区北側帯曲輪に2504区を設定、調査開始。	8月23日	調査区内に遺構実測用基準杭を設置。
	7日	2504区調査終了。遺構は確認できず、S D 24は	9月15日	遺構実測図作成終了。
			27日	重機による調査区の埋め戻し。

第2節 調査区の概要と検出遺構

2501区・2502区（図19・20，図版12～15）

24年度保存整備工事に伴い、S F 03の範囲や形状などを確認するために設定した調査区で、1次調査範囲と一部重複している。三城南東側で検出した城門跡 S B 08の北側付近から、19次調査 T 1903までの約20mの間で設定し、その中間付近の土層観察用ベルトを境として北側を2501区、南側を2502区とした。

調査の結果、1次調査で検出した S F 03や柵列跡 S A 01、城門跡 S B 08、溝跡 S D 07のほか、S B 08南側で新たに柵列跡 S A 04を検出した。今回の調査によって、三城へと至る道路や城門、柵のセット関係がより明確になったといえる。以下では、1次調査で未確認部分を検出した S F 03や S A 01、新たに検出した S A 04について報告したい。

S F 03 上述のとおり、本遺構は西岡台南側から三城へ上るための通路として機能しており、現代においても里道として踏襲されていたことを1次調査で確認している。三城南東側付近から南北方向に延びるが、S B 08手前で西側に向かって直角方向に折れ、階段状に地山を削り出だした部分を上って S B 08に至ることが判明している。

検出規模は、長さ約19.2m、幅は約1.2～4.0mで、地点によって幅が大きく異なることが判明した。傾斜角度は約9°である。19次調査では通行に伴うとみられる硬化面を検出したが、今回の調査では明確な硬化面を確認することはできなかった。なお、2502区中央付近で重機による削平を受けていることが判明した。

S A 01 S F 03の北側から切岸上端にかけて沿うようにして配置された柵列跡である。検出規模は約6.8mで、平面プランはLの字形を呈する。

第2節 調査区の概要と検出遺構

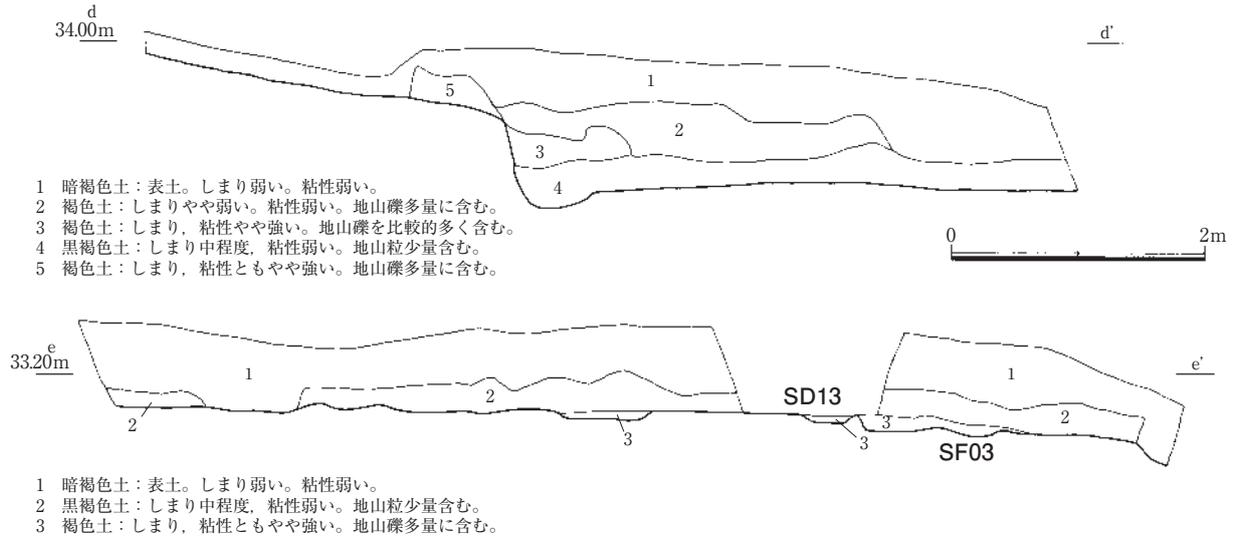


図20 2502区土層断面図 (1/60)

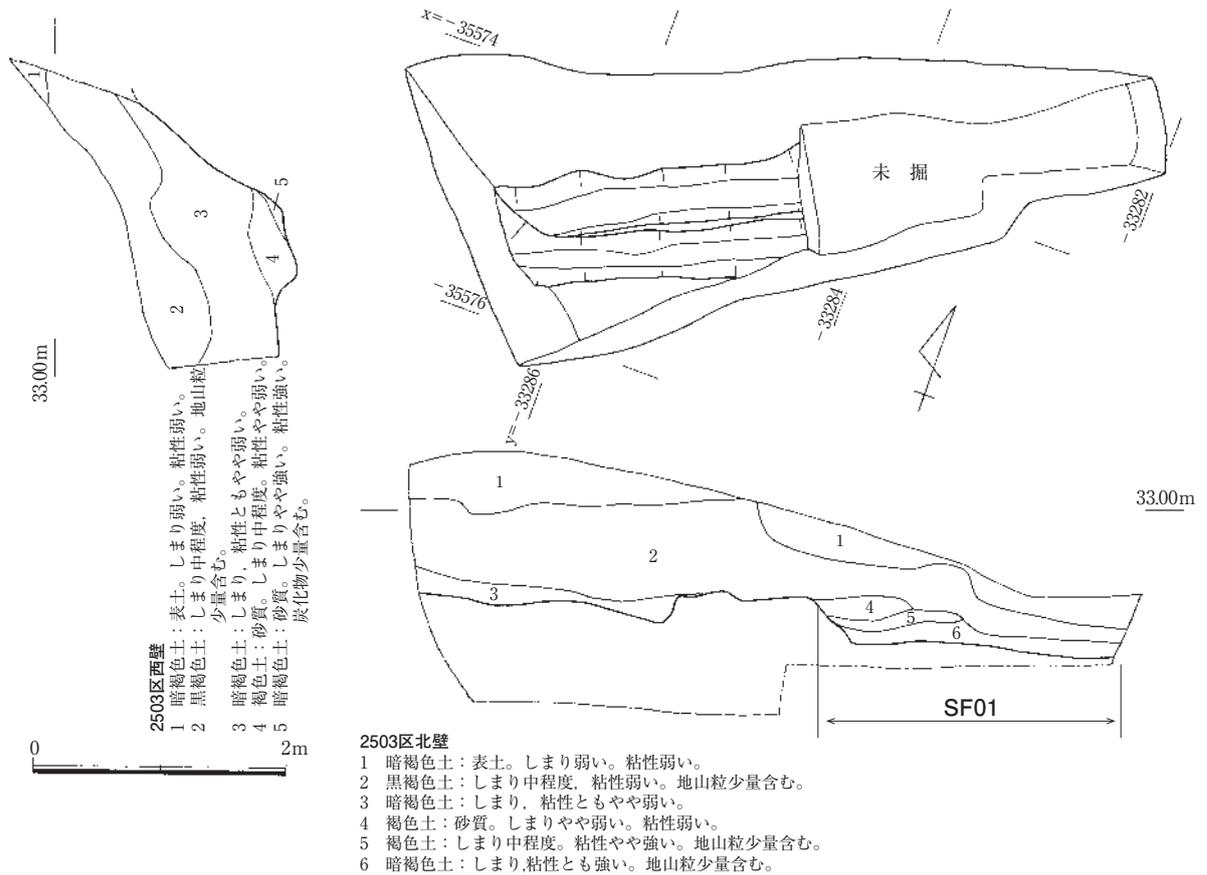


図21 2503区平面図及び土層断面図 (1/60)

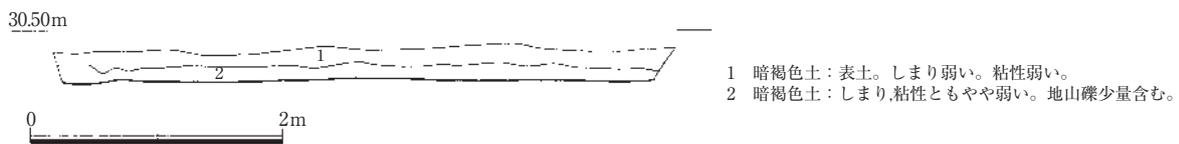


図22 2504区北壁土層断面図 (1/60)

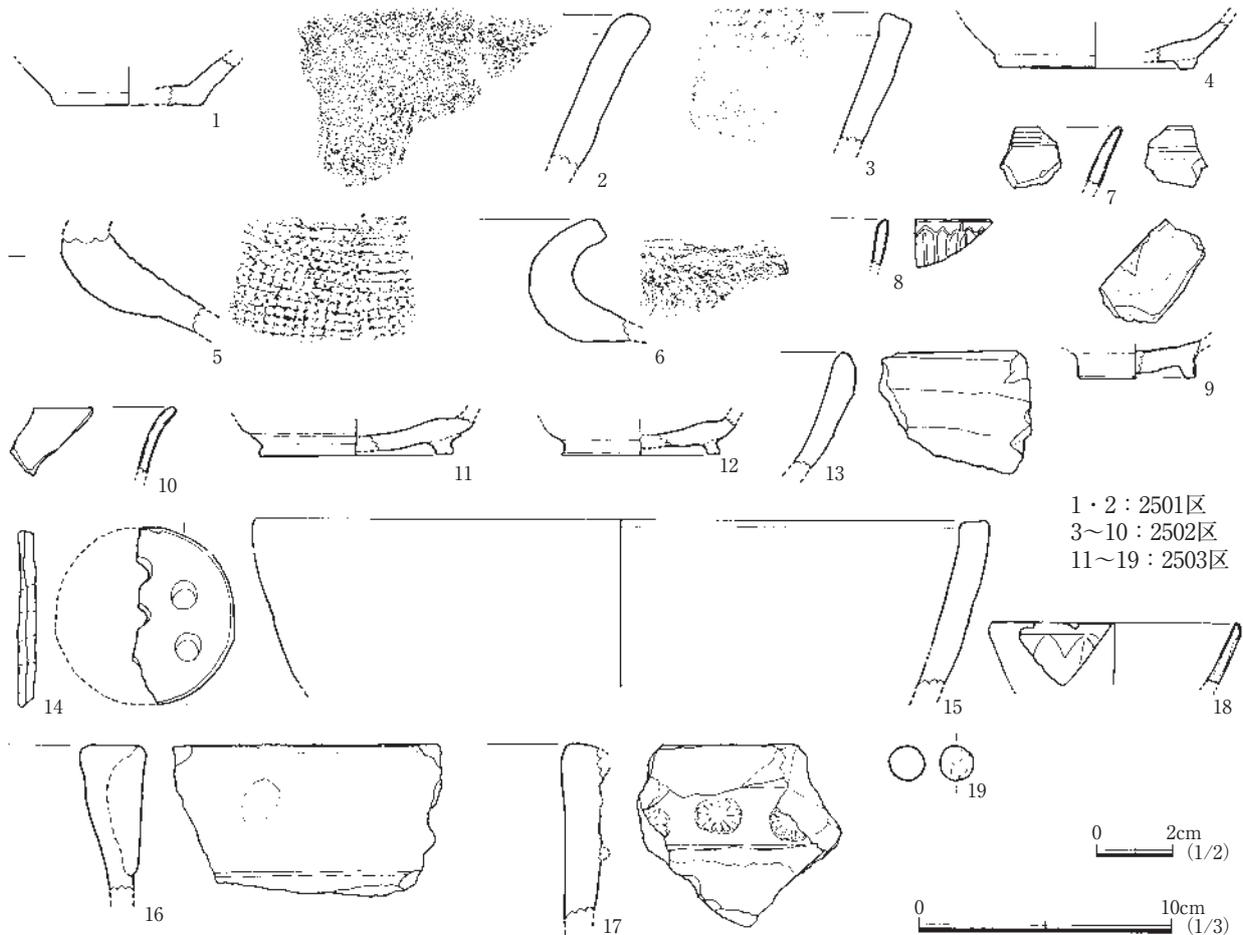


図23 25次調査出土遺物（19は1/2，その他は1/3）

SA04 SB08南側に位置し，SF03西側から切岸上端部を沿うようにして配置された柵列跡である。検出規模は約10.7mである。調査区西側の未調査区域にさらに延びる可能性がある。

2503区（図21，図版15）

SF03の範囲確認を目的として，平成18年度に調査実施したT1902の北約3m付近に本調査区を設定した。

調査の結果，SF03の一部を検出したが，後世の削平とみられる造作で斜面部において断面部分を検出したのみであった。検出最大幅は約2.4mであり，東側の未掘部分に反対側の立ち上がりが存在するとみられる。

2504区（図22，図版15）

第24次調査で検出した溝状遺構SD24について，竖堀の可能性があったことから，その存在の有無を確認するため24次調査区北側のSD24主軸延長上の三城北東側帯曲輪に設定した調査区である。

調査の結果，表土除去後，遺物包含層を約20cm掘り下げたところで地山面を検出した。本調査区では遺構を検出しておらず，SD24は竖堀ではないことが判明した。

第3節 出土遺物

遺構外出土遺物（図23，表6，図版16）

2501区 1は土師質土器の坏である。2も土師質土器で，器種は播鉢である。全体的に摩耗が著しいが，

内面に挿目が確認できる。

2502区 3は土師質土器の挿鉢で、5本単位の挿目を施す。4・5は須恵器。4は古代の碗の底部片、5は甕の胴部上位の破片で外面は格子状タタキ痕が残る。6は瓦質土器の甕の頸部片。7・8は龍泉窯系青磁の碗。7は12～13世紀代のもので、口縁部内面に2条の界線を施す。8は外面に剣先蓮弁文を施すもので、15世紀中頃～同末頃の製作。9・10は中国製白磁。9は皿とみられ、明代の製作。10は13世紀～14世紀中頃のいわゆる口ハゲの白磁碗である。

2503区 11・12は古代の須恵器で、碗の底部片。13・14は土師質土器で、13は鉢、14は近世の目皿で、直径1cm程度の複数の穿孔を有する。15～17は瓦質土器で、15は捏鉢、16・17は火鉢である。16は口縁部外面が鉢巻状に肥厚しており、17は口縁部外面に横位に連続するスタンプ文（菊花文）を施文している。18は13世紀代～14世紀中頃の龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。19は鉛玉で、鉄砲玉として使用したものであろう。

表6 25次調査出土遺物観察表

2501区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)(残存値)	備 考
1	25-12	土師質土器 環	1mm以下の砂粒	やや不良	内外:橙	内:摩耗のため不明 外:ナデ	攪乱層	②〈1.9〉③〈6.0〉	
2	25-5	土師質土器 挿鉢	雲母, 角閃石, 1～ 2mm程の砂粒	良好	内:橙 外:にぶい黄橙	内:ナデ, 挿目 外:ナデ	攪乱層	②〈6.2〉	

2502区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)(残存値)	備 考
3	25-8	土師質土器 挿鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内外:にぶい黄橙	内:ナデ, 挿目 外:ナデ	包含層	②〈5.3〉	
4	25-16	須恵器 碗	1mm未満の砂粒	やや不良	内:褐灰 外:灰黄褐, 黒	内:ナデ 外:ヨコナデ	表土層	②〈2.0〉③〈8.0〉	
5	25-6	須恵器 甕	1mm程の砂粒	良好	内外:灰	内:ナデ 外:格子状タタキ, ナデ	包含層	②〈4.1〉	
6	25-3	瓦質土器 甕	石英, 角閃石, 1mm 程の砂粒	良好	内:浅黄 外:にぶい黄橙	内:ナデ 外:タタキ, ナデ	表土層	②〈4.9〉	
7	25-17	青磁 碗	緻密	良好	釉:オリーブ黄 胎:灰黄	内外:施文, 施釉	表土層	②〈2.4〉	龍泉窯系
8	25-18	青磁 碗	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:施釉 外:施文, 施釉	包含層	②〈1.9〉	龍泉窯系
9	25-13	白磁 皿	緻密	良好	釉:明オリーブ灰 胎:灰白	内外:施釉, 回転ナデ	表土層	②〈1.5〉③〈4.6〉	中国製
10	25-14	白磁 碗	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内外:施釉	表土層	②〈2.7〉	中国製

2503区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)(残存値)	備 考
11	25-10	須恵器 碗	1mm程の砂粒	良好	内:黄灰 外:灰	内外:ナデ	包含層	②〈1.5〉③〈7.4〉	
12	25-11	須恵器 碗	1mm以下の砂粒	良好	内外:灰	内外:ナデ	包含層	②〈1.5〉③〈6.0〉	
13	25-7	土師質土器 鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内:灰黄 外:浅黄	内外:ナデ	包含層	②〈4.7〉	
14	25-9	土師質土器 目皿	角閃石, 1mm以下の 砂粒	良好	内:橙 外:にぶい橙	ナデ	包含層	直径7.0, 厚さ0.7	
15	25-4	瓦質土器 捏鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内外:灰白	内外:ナデ	表土層	①〈29.0〉②〈6.7〉	
16	25-1	瓦質土器 火鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内:にぶい黄橙 外:褐灰	内:ヨコナデ, ナデ 外:ヨコナデ	包含層	②〈5.9〉	
17	25-2	瓦質土器 火鉢	角閃石, 長石, 1～ 2mm程の砂粒	良好	内:灰黄褐 外:黄灰	内:ナデ 外:ナデ, 施文	包含層	②〈7.0〉	
18	25-15	青磁 碗	緻密	良好	釉:緑灰 胎:灰白	内外:施釉	包含層	①〈10.0〉②〈2.5〉	龍泉窯系
19	25-19	鉛玉	鉛	-	灰白	-	包含層	④4.2	鉄砲玉

比高差も約2～3mとさほど高いものではない。

一方、千畳敷では、曲輪を圍繞する横堀S D02や放射状に配置された大規模な縦堀（S D19、S D22など）が存在するだけでなく、千畳敷とその直下のS D02堀底との比高差は5mを超えており（未完成部分の北側を除く）、最も比高差がある地点では8mを超えるなど防御性に優れている。普請に伴う労働力は三城よりもはるかに大きいことが明らかであり、掘立柱建物跡の重複も著しく遺構密度も極めて高い。千畳敷と三城の利用のされ方や性格の違いが曲輪の造作の差異に反映しているとみられる²⁾。

（2）三城及びその周辺の検出遺構と特徴について

次に三城及び周辺の検出遺構とその特徴についてふれてみたい。1次調査では、三城の広範囲にわたり発掘調査を実施し、4棟の掘立柱建物跡について報告しているが（宇土市教育委員会1977）、宇土城跡保存整備に伴う再検討で少なくとも10棟の建物が存在したことが明らかとなった。これらは全て掘立柱建物跡であり、このうちS B20は東西方向（桁側）に並行する2列の溝（幅約1m）を細長く掘り下げて柱を据えた後、柱の周りを土で埋め戻す、いわゆる「布掘り建物」であり、中世宇土城跡では唯一確認されている。

重複関係や建物主軸方向の相違などから推定される三城における掘立柱建物の変遷は、I期（S B19・S B21）→II期（S B06・S B18）→III期（S B03・S B17・S B22）→IV期（S B04・S B05・S B20）で、最も新しい段階のIV期（16世紀後半～末頃）をもって廃城となったとみられる³⁾。

また、掘立柱建物がI～IV期にわたって比較的長期間、恒常的な建物が存在したとみられるにもかかわらず、これらの建物群と三城西側のS D09との間の敷地は遺構をほとんど検出していないことは注目される。つまり、三城において一貫して空地地といえるような場所が存在していたことを示しており、ひとつの可能性として庭園的な空間の存在を指摘することができよう。三城西側の遠方には山姿が美しい白山（標高約218m）を眺望することができることから、白山を借景とした庭園的空間が存在したのかもしれない⁴⁾。

一方、三城を取り巻く帯曲輪では、三城東側で掘立柱建物跡が集中することが判明した（宇土市教育委員会2014）。計12棟の掘立柱建物跡を検出しており、これらの建物跡は柱穴の重複関係や建物の主軸方向の相違などから、I期（S B25〔S B24の可能性も有り〕）→II期（S B24〔S B25の可能性も有り〕・S B28）→III期（S B26・S B29）→IV期（S B27・S B30）→V期（S B31・S B32〔S B27と主軸が直交方向しており、S B27が同時併存した可能性有り〕）→VI期（S B33・S B34）→VII期（S B35）と少なくとも7時期にわたって存在したと想定される。三城の掘立柱建物群との対応関係は判然としないが、建替えを繰り返して長期間にわたって当地に建物が存在した可能性が高い。また、城門跡S B08や道路状遺構S F03も三城東側に位置している。一方、三城東側の帯曲輪以外では遺構密度が比較的低いか希薄であり、総じて東側から西側に向かうにつれて遺構が少なくなる傾向を把握することができた。

その要因として、領主や家臣団の屋敷地が存在したと想定される西岡台南側から三城へ入るためには、三城南側の道路状遺構S F03を通行し、門跡S B08を経て三城へと至るルートが想定されることから、実質的にS B08周辺は三城の虎口に相当する空間であることを指摘できる。その北側に隣接する21次調査区周辺は、三城の防衛上、重要な場所であることは明らかであり、城の機能を支える何らかの建物（施設）が恒常的にこの付近に存在したとみてよいだろう。

註

- 1) 三城西側周縁部は遺構が確認されていないことから、この部分にかつて土塁が存在した可能性がある。S D09は、この土塁とセット関係にあると想定され、導水状遺構西側に並走する形で土塁が配置されたとみられる。S D09は、その配置状況から三城中心部から西側へ向かって流れてくる雨水と、土塁の水受けのために設けられた可能性がある。
- 2) 千畳敷周辺の調査では、儀式や饗応などの非日常の場で使われることが多い土師質土器の坏（かわらけ）が大量に出土し、出土遺物の9割以上を占める。一方、三城では、かわらけの出土量が少なく、千畳敷ほどの高い割合ではない。千畳敷と三城の使われ方や機能の違いを反映している可能性がある。
- 3) 平成22・23年度に実施した三城の掘立柱建物跡遺構表示（平面表示）は、Ⅳ期を対象とした。
- 4) 宇土城跡保存整備検討委員会委員の稲葉継陽氏の御指摘による。

引用・参考文献

- 宇土市教育委員会 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
 1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集
 2007『宇土城跡（西岡台）』Ⅸ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集
 2009『宇土城跡（西岡台）』Ⅹ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第31集
 2012『宇土城跡（西岡台）』Ⅺ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第33集
 2014『宇土城跡（西岡台）』Ⅻ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第34集